SHOC project 2022 スタディツアー報告書

【日程・活動地・参加者】
2022 年 9 月 1 日（木）～2 日（金）　福島県いわき市にて
聖心女子大学 SHOC project メンバー8 名（3 年 2 名・2 年 2 名・1 年 4 名）で参加

【活動目的】
オーガニックコットンの栽培を通して東日本大震災被災地を支援する、という SHOC project の活動の原点であるいわき市現地を訪れ、共働している団体である NPO 法人ザ・ピープルさんを訪問、いわき市での活動について直接お話を通して学ぶ。本場のコットン畑を視察したり、畑の管理に関してアドバイスをいただき、コットン栽培についての知識を高める。そして、現地を回りながら東日本大震災に関して学び、自分たちの活動の目的を再認識する。

【活動内容】
〈1 日目〉
① NPO 法人ザ・ピープル小名浜ボランティアセンターにて理事長・吉田様によるご講話
・東日本大震災は、地震と津波による自然災害と福島の原発事故による人為的災害が起きた、複合的な災害である。甚大な被害を受けた福島の農業を元気にすること、震災後発生した新しいコミュニティで人々がどう共生していくか、という 2 つが、吉田様たちが活動をしていくなかで見えてきた課題である。一度失われたものを完全に戻すことは難しいが、これからは福島の復興というよりは福島の未来をつくるために SDGs の視点が重要だと考えている。震災から 10 年以上経ち、人々の記憶が薄れゆく今だからこそ、伝えていくためには多くの人との繋がりがより一層必要になる。
・NPO 法人「ザ・ピープル」は東日本大震災のずっと前から、住民主体のまちづくりを目標に、循環型社会を目指すため古着リサイクル事業を始めとして活動をしていた。活動の幅は年々広がり、ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの他、災害救援や海外支援等も行っている。「自分たちの手で」「みんなで協力すること」を大切に活動している。
・ふくしまオーガニックコットンプロジェクトは東日本大震災を機に始まった、コットンから福島の農業と人々を元気にしようという取り組み。放射能による影響が少なく、食用でないため風評被害を受けにくく、塩害にも強いということでコットンの栽培が選ばれた。ザ・ピープルが栽培しているのは備中茶綿という昔から日本にある種で、収穫後は靴下や T シャツ、人形などに製品化される。オーガニックコットンはサステナブルファッションとしても注目が集まっている。一連の事業から福島の農業を再生するとともに、コットンを育てる

活動を通して、年齢や地域の壁を越えて人と人とを繋いでいる温かい活動がふくしまオーガニックコットンプロジェクトである。

② いわき市小名浜上神白（カミカジロ）「みんなの畑」にて、除草お手伝い
・上神白にある「みんなの畑」は、コットン畑でのコットン栽培を通して、震災により市内に避難して来られた人々と、地域の農家さんやボランティアのみんなで仲良くなろう！ということで作られた畑。
・オーガニックコットンプロジェクトチームの原田仁さん、渡辺健太郎さんにお手本を見せていただき、草刈りの農具を使用してザ・ピープル吉田さんとともに除草作業がスタート。
・大学の畑より遥かに広く、畝と畝の間の草を取っていくだけでも大変だったが、原田さんたちが優しくアドバイスしてくださり進めることができた。
・一人一列で一斉にスタートしたため、自然とレース式に・・・みんな集中して黙々と作業していたが、やはり農家さんの速さには敵わなかった。

・途中雨に降られたものの、中断せずにみんなで頑張って除草作業も無事終了！いい汗をかき、終わった頃にはみんな笑顔に。

・大学の除草作業も頑張ろうと思える経験となった。

③　ザ・ピープルの古着倉庫の見学

・予定にはなかったが、急遽古着倉庫の見学もさせていただくことになり、再びザ・ピープルの事務所へ・・・古着の山にただただ圧倒された。

・ザ・ピープルは東日本大震災以前から地域での古着リサイクル活動に取り組んでいた。

・背景には、アパレル業界の環境への悪影響への問題意識があった（ファッション業界が出す廃水や温室効果ガス、処分される繊維の多さなど）。

・サステナブルファッションの材料としてオーガニックコットンが注目されている。

・倉庫内で仕分け作業をした後、状態の良いものはチャリティショップで販売され、地域内でそのまま活かされる。

・チャリティショップへ回せない衣服は工業の手入れに使用されるウエス材として活用される。ウエスを製造・販売する作業所は障がい者の方々が働く場となり、自立をサポートする場でもある。

・ウエス材としても活用できなかった衣服はエコウールリサイクル（繊維状態にしてフェルト化→自動車内装材）に回され活用される。

・ザ・ピープルの古着倉庫での古着仕分け作業の勧誘ポスターを持つ吉田様（写真右）。現地の学生たちと協力して作成したそうだ。

・古着の山は人が登れるほど高く、大きかった。仕分け作業は時間の関係でできなかったが、山に登らせていただいた。
・メンバー全員が乗ってもびくともしなかった・・・。
・膨大な量の衣服が毎日のように捨てられているという事実を知るとともに、自分が服を購入するときに値段だけでなく素材や長持ちするかどうか、本当に必要なのかを考えなければならないと感じた。

最後に一日中お世話になった吉田様と！（泉駅前にて）

〈２日目〉湯本温泉「古滝屋」16 代目当主・里見様によるＦスタディツアー

・案内人の里見さんはいわき市出身。東日本大震災の際には旅館を救援物質の配布拠点としたり、全国から訪れたボランティアに客室を提供した。さらに原発事故やその後の福島の生き方を社会に伝える今回のツアーや、「原子力災害考証館」の創設を行い自ら語り部として活動している。
・古滝屋からバスでいろいろな場所へ案内していただいたが、まず最初に東日本大震災当時の「記憶」について、一人ひとり語る時間があり、皆それぞれ感じたことや思ったことは違えども、語れるくらいには「記憶」しているということがわかり、それほど衝撃的な出来事だったことが伺えた。
・里見さん曰く、ちょうどわたしたちの世代くらいが東日本大震災を記憶している最後の世代だという。だからこそ今回語ったような震災の「記憶」を忘れないためにも「伝える」ことをしてほしいとおっしゃった。

～バスの窓からみえた景色～

↑震災による土砂崩れで、その断面がみえていた。

↑家屋の跡地にまで進出したおびただしい数のソーラーパネル。
電力を首都圏へ送っている。

↑未だに震災後放置された家の解体作業が続いている・・・。

・「夜の森駅」は比較的新しい駅だが、震災により周囲から人はいなくなってしまった。
・駅内には放射能の値がわかるパネルが設置されていた。
・近くにあった自販機は震災当時の状態のまま放置されており、「人がいない町」というのを実感させられた。
・周辺の家ももちろん人は住んでいないという。

↑震災後、住人が戻らなくなってしまった家には泥棒に入られることが多く、一見綺麗な状態の建物でもこのように窓を正面から割られている家がほとんどであった。

↑瓦屋根は地震によって剥がれ落ちる。雑草が手入れされている家は管理している人がいる、ということだという。逆に伸び放題になっている家は震災により帰らぬ人となった可能性が高いと里見さんはおっしゃった。

↑沿岸部にも連れて行ってくださった。写真奥に見える高台まで津波が到達したという。さらに向こう側には原子力発電所がみえる。

↑かつては賑わう公園だった場所は、いまでは草が生い茂り、ポツンと放射能の値が測定できる機械が立っている。

・ツアーの最後に、小名浜にある水族館「アクアマリンふくしま」へも連れて行ってくださった。
・「アクアマリンふくしま」は東日本大震災による停電の影響で水の循環などができなくなり、9割以上の生き物が死滅したといわれている。
・トドなど生き残った生き物たちは別の水族館へ移された
・今では多種多様な生物をみることができ、水族館の関係者の方々の、どうにかして復旧させようという思いが伝わる見ごたえある素敵な水族館であった。

【参加者の声】
〇1 年生
・吉田様のお話を聞いてザ・ピープル、SHOC の活動について理解することができた。そして実際に自分の目で、被災地の現状を見て知れたので良い機会になった。家などがあるのに人気が無い場所は初めてだったので、本当にこんな所があるのかと驚いた。また、3.11 の事についてメンバーのお話も聞いて、それぞれの体験があったんだなと知れた。同じ日本だが、知らない事はとても多いんだなと思った。水族館も楽しかった。

・1 日目は、普段 SHOC project の一員として私たちが育てているコットンが「誰のために」「どのように」役立てられているかを肌で感じることができ、本当に嬉しい気持ちでいっぱいになった。ザピープルの方々から被災地や活動に関するさまざまなお話を聞かせていただき、SHOC としてどのような気持ちを持って活動すべきか改めて考えることができた 1 日となった。2 日目の夜ノ森地区の散策では、遠目から見ると人が当たり前に住んでいそうな場所なのにも関わらず人の気配が全くなく、残された家の窓からは 11 年前の生活の痕跡が覗いている状況に大きな痛ましさを感じた。少し震災の起きた場所が違えば、原発のあった場所が違えば、のように、「もし〇〇だったら」自分の身に同じことが起こっていたかもしれないと思うと、絶対に被災地の現状から目を背けてはいけないと思った。大変な被害を受けた方々が前を向いて福島のために頑張る姿を見て、私も微力ながら SHOC の一員として復興に携われていることを誇りに思う。被災地のために自分には何ができるのか、より一層考えてみようと思った。

・一日目は、吉田様のお話を聞いたり、コットンの畑に行った。正直、自分たちが育てているコットンについて深い知識がなかったが、吉田様のお話を聞き私達の活動がどのようなことにつながっているのかを知ることが出来た。2 日目は、里見様によるツアーをしていただき、自分自身震災を経験した身として、同じように被害を受けた地域に行くことで、2011 年 3 月 11 日のことを改めて思い出すとても大事な経験になった。

・吉田様のお話を聞き、オーガニックコットンの栽培が福島の農業の再生に貢献しているだけではなく、人々の繋がりを築いていることを知った。ザピープルの取り組みが様々な面で大きな役割を果たしていることがわかった。2 日目のツアーでは、11 年前のまま止まった自販機や、家主と連絡がとれず除染されていない家、泥棒に割られた窓などを目の当たりにして、上手く言葉にできないが、衝撃的だった。また、原発が再稼働する場合や処理水が海に放出されることになった場合、風評被害を受けるのは福島の方々だということを吉田様、里見様の話から痛感した。私自身、原発をめぐる問題に関してあまりにも無責任だったことを思い知らされた。このスタディーツアーを通して学んだこと感じたことを

大事にし、SHOC project の一員として少しでも活動に貢献できるように頑張りたいと思った。

〇2 年生
・震災から 11 年が経ち、わたしたちの記憶もだんだん薄れていく中、その現地に行かないとわからなかった現場の様子や雰囲気を感じ取ることができた。特に印象的だったのは、夜ノ森地区の散策で、誰も住んでいない家が転々と残っていて、部屋を覗くと生活していた痕跡がまだある家も多く、被害にあったその家族のことやその後の人生が大きく変わってしまったことについて深く考える時間だった。里見様もおっしゃっていたが、私たちは実際に震災を経験し、記憶がある最後の世代だと思うので、今回の経験を後世に伝えていく必要があると感じた。

・1 日目は、ザ・ピープルで吉田様のお話を聞き、震災後にそれまで通りの農業を続けることが難しくなった農家さん、風評被害のある福島県の復興のためにという、私たちの活動の意義を再認識することができた。また、震災だけでなく、SDGs の観点からも有意義な活動であることを知り、両方の意味で継続していくべき活動だと思った。2 日目は夜ノ森地区を散策し、人気のない住宅街で 11 年前の当時のまま残されている家を見て、そこに住んでいた方々の思いやその後の生活の影響ついて考えさせられた。実際に現地で見て感じたことやお話を聞いて学んだこと、私たち自身の震災の実体験を大切にして、次の世代に伝えていきたいと思った。

〇3 年生
・今回のスタディツアーを通して、農家さんがオーガニックコットンにかける思いを理解することができ、今後我々がオーガニックコットンプロジェクトをどのように進めるべきかの方向性を十分に理解することができた。震災から 11 年経った今も心の傷が癒えない方は沢山いるということを忘れずに、被災地復興のための 1 プロジェクトであるオーガニックコットンプロジェクトに真摯に向き合って活動していきたいと改めて感じた

・「復興」とは何かを改めて考えさせられた 2 日間であった。自分は以前福島の南相馬や浪江町を訪れ、帰宅困難区域を車の中から見たが、今回は人が住んでいるように見えて「人が帰って来ない家」を車から降りて、間近でみることができたのが印象的だった。東日本大震災のあと盗難被害を受けた家がほとんどで、雑草が放置されている家は住人が行方不明だったりこの世にはいない可能性があること、また中には最近リフォームした家もありまた福島へ戻って暮らしたい人がいることを知った。震災から 10 年以上経った今なお、福島はコミュニティの崩壊や原発との共存など多くの問題を抱えている。そのことを隠し、福島の「復興」したような部分だけを伝えるのもまた問題であると思う。だからこ

そ SHOC project のメンバーとして活動を続け、これからも福島の人たちとつながっていきたいと思うし、少しでも多くの人に福島の現状を伝えていくことが自分にできることであると考える。また今回のツアーを通して震災への理解を深めるだけでなくメンバーとの仲も深めることのできた大変実りある時間となったと感じる。
ザ・ピープルの吉田様、ツアー担当の里見様をはじめ、本ツアーを実現するにあたってサポートしてくださった大学関係者の方々には改めて感謝申し上げたい。

現地の高校生が撮ってくださった写真：ツアー終了後、湯本駅前にて里見様と。